

世界観の創造と議論

京都工芸繊維大学 工芸学部教授 木原 壯 林

大学の教師や公立研究所の研究員は恵まれた職業である。それは、新しい知見を得、旧来の地平を超えた世界観を創造すること、それを他人に伝授することを公に認知されているからである。ただし、新しい知見を蓄積することは容易であっても（これは学習によってできる）、世界観を創造する力の養成は簡単ではない。では、この創造力はどうしたら獲得できるか。

私は実験化学を志す者であるから、当然、実験結果の推敲によって見いだされた真理から世界を洞察しようとする。しかし、一途に実験に熱中していても、その過程や結果の考察にあたって個人の枠内で逡巡していれば、創造力の発展には限界がある。

もう一つは議論である。議論は耳と口と頭で行う実験と言ってもよい。議論すれば相手の知恵を短時間の内に、安直かつ確実に手に入れることができるし、それに参照して、いままで混乱していた自分の考えを整理検証でき、新しい発想を生むことしばしばである。

分析化学の碩学、アリゾナ大学名誉教授のフライザー先生は私の恩師でもあり友人でもある。この人も大の議論好きで、来日の折など運転中といえども助手席から化学の詳細にわたる議論をふきかける。また、深夜まで酒を酌み交わしながら討論するが、その後、重要な話題に関するメモを作成するらしく、翌朝にはそれを見せながら内容の確認に及ぶ。他人の知恵の吸収や新しい視点の獲得への貪欲さには驚嘆する。

私は学会や委員会に出席すれば必ず一言は発言するようにしている。嫌がられるむきもないではないが、発言しようとすることによって、渦中の者として話題について真剣に頭を使うことができるし、他の出席者

の考えを引き出すこともできるからである。

議論は目の前の相手とだけとは限らない。論文を国際誌に投稿すると、専門分野の国際レベルでの第一人者の審査を受けることになるが、この審査意見とそれに対する反論がまた楽しい。世界的視野での議論が思考を飛翔させる。コメントもなく採用されると、一般には手間が省けたとして歓迎されるが、私には拍子抜けである。

世界観の創造にあたって議論がいかに重要であるかは、ギリシャ時代の哲学が本来の意味でのシンポジウムを通して、中国の思想が春秋戦国時代の諸子百家の争鳴を経て形成されたこと、また、京大物理学教室で同時期、同門に学んだ湯川、朝永、坂田博士らが日夜の真剣な議論によって世界を凌駕する大理論を確立したことを思い起こせば領ける。なお、これらの例のいずれの場合でも、それに相応しい場（卓越した人材の密集）の存在が発展的議論を保障していたことに気付く。

今世紀初頭に自然科学、社会科学を問わず新しい思想が提出されてからほぼ百年を経る。そろそろ全く斬新な思想が提起されても不思議ではなく、それに向けて高邁な議論が沸騰して欲しいと願っている。しかし、経済発展を遂げ、安定した現在の社会状況の中で、未来を担う若い人達に議論が不足しているように思えてならない。気宇壮大な議論の場を準備することも私達先達の務めであろう。議論の喚起およびその場の保障は、大学、研究所だけでなく、あらゆる社会に求められることでもあろう。

